

久松潜一著

年々去来

田中重太郎

本書はわが国文学の泰斗であり、昭和四十一年まで十年近く本学に集中講義をせられた久松潜一博士の随想集である。

本書のサブタイトルに「一国文学徒の思出」とあるが、文化功労賞を受けられた斯学の第一人者の、謙虚にしてこよなく御誠実なお人がよくにじみ出たエッセイである。

その内容を目次によって順に示すと、

1 故人・今人 (二一～三〇頁) には、

「明治の文人・学人——上田万年・芳賀矢一・姉崎嘲風博士——」「思い出の人々——和辻哲郎・津田左右吉・木下杢太郎氏ら——」からはじまって「風巻景次郎君の学問」「池田亀鑑博士の学問」「西下経一博士の学問」など恩師・先輩・知友・教え子などの死を悼み、偲ばれる二十八編の文がならんでいる。これらの中には、もともと追悼文として書かれたものでないものもあるが、昭和四十二年七月現在では、それがすべて著者久松潜一先生のあたたかい、そして、かなしい思い出として綴られている。ところどころに挿入せられている写真には、わたしどもがお名前だけ聞いていてお目にかかったこともない先生方のお姿やお顔を拝することができてうれしい。五十歳をこえたわたくしでもそんなのだから、若い人々にはこれだけでもありがたい本であろう。円地文子の嚴父である上田万年博士をはじめ芳賀矢一・藤村作・橋本進吉・池田亀鑑らの諸博士の写真が載っている。

2 幼時から学窓を出るまで (三一～一七六頁) は、

著者の故郷愛知県知多半島東浦のことを述べられた「郷里知多」からはじまり小学校の恩師の「重厚さと情熱と」、「わが家の紋章」「一中のころ」「私の受けて来た教育——特に中学校時代の思出——」「老いた中学生の会」「石村貞吉先生と私」「ゆっくりと、しかし休まずに」「八高のころ」「高校生ころ」「古典文学に目ざめる——私の学生時代とその後——」「大学生ころ」におよぶが、久松博士が旧制中学でマラソンによる心身の鍛錬をせられたことなど興味深く、国文学に志されるようになった博士の動機や過程を教えられて感慨深い章である。

3 教壇生活の思出 (一七七～二四四頁) には

「私の書齋」「修学旅行——京都と奈良——」「新緑のころ——東大を退いて——」などから「陛下に御進講」「礼官御命名のいわれ」「国文学四十年」「国文学に生きて」にいたる十六編で、学者として、教育者としての著者の人間像がよくうかがわれる。そこには、東大を御退職なさったときの博士のお歌
野の人となりし朝けを庭に下りうつくし
と見る芽ぶく楓を

があり、著者が四十数年間講義をおつづけになっている目白の日本女子大学の卒業生に贈られた文の中で、世阿弥の「年々去来の花を忘れず」を引かれ、これに心をひかれて、「これは学ぶものの態度を言ったのであるが、教えるものの態度にもなると思う」と結んでいられる文にある。本書の書名の由って来たるゆえんである。著者のお気持ちがわかるであろう。

4 生活と読書 (二四五～三〇〇頁) は、

「父親(私)の記」からはじまり、「母を思いて」「人の一生」「孫三題——孫の言葉・孫の成長・由伎子への手紙——」「大雅と玉瀾」「老境」「読書遍歴」「わが愛読書」「愛読の書」「万葉集と一中精神」「近代文学館の進展」など十四編から成るが、久松博士の御両親のこと、御家族の構成や御生活がよくわかり、この章にも写真の挿入があつて、読む者へのこよなき親しみをもたらしている。

5 自然と旅 (三〇一～三六六頁) には、

「焼跡の花」「銀杏の黄ばむころ」「隅田川への郷愁」「某月某日」「契沖の墓」「温泉雑感」「年々の花」「花と文学」「正月の思出」「新年雑感」「早春

雑誌「はまゆうの花」などが収められているが、花を愛される著者のやさしいお心に触れ得てありがたい。この章には「祇園慕情」という一文もあるが、「まこと」の理念を追求せられる博士のそれは、やや学問的である。

……常凡な生き方しか出来ない私であるから、常凡なことしか書けないが、それでもたどって来た七十年を顧みると、人生の哀歓をそれなりに感じて生きて来た。……

(あとがき)

と著者はいわれる。わたくしは、かつて著者の旧著「恩頼抄」からうけたとおなじこの謙虚な著者のおことばからそのお人がらにうたれ、全巻を通じて流れる真実のたつとさに深く感動した。

文学博士であり、文化功労者であり、日本学士院会員であり、東大名誉教授であり、文化財保護委員であり、現在も各大学の教壇に立っていらっしゃる、わが国文学界最高の学者の、この随想集を読むことによって、まことにつつましかで、淡々として飾らぬ文章に、そのお人がらをいまさらながら肝銘感激したことを伝えて、あえて新刊紹介の辞にかえ、ひろく大方諸賢に本書をおすすめするとともに、本学で久松先生の講筵につらなった人たちの必読を急する次第である。

B6判 三七八頁。 昭和四十二年十月十日刊。 広済堂出版 定価四九〇円